

## ヤクシマハウビシダについて

メタデータ	言語: Japanese 出版者: 公開日: 2022-03-24 キーワード: 作成者: 杉本, 順一, 倉田, 悟, Sugimoto, J., Kurata, S. メールアドレス: 所属:
URL	<a href="http://hdl.handle.net/2297/00065717">http://hdl.handle.net/2297/00065717</a>

This work is licensed under a Creative Commons Attribution-NonCommercial-ShareAlike 3.0 International License.



## 杉本順一\*・倉田悟\*\* ヤクシマホウビシダについて

J. Sugimoto & S. Kurata : On *Asplenium obliquissimum* (Hayata)

Sugimoto et Kurata.

本邦南部に産するホウビシダには2型が認められ、大隅国屋久島にはこの両型、即ち通常のホウビシダ (*Asplenium unilaterale*) とその変種とされて来たタイワンヒメホウビシダ (var. *obliquissimum*) とが分布している事は、諸学者により既に古くから明らかにされていた(例、正宗厳敬1934年)。屋久島ではタイワンヒメホウビシダの方がホウビシダより海拔高の高い山奥に多い様で、海拔500~1000 m 附近では各所に普通に見られ、水の滴たる崖を被つて大群生し、概してホウビシダより一層陰湿の地に生育している。タイワンヒメホウビシダという和名は過去においても多少混乱して用いられており、又、ヒメホウビシダ (*Athyrium Nakanoi*) とは無関係の本羊歯の事でもあり、豊産地にちなみ今後はヤクシマホウビシダ(杉本、植物検索誌第一巻、1951年)という和名を採用したい。尚、本羊歯の和名としてはこの他、ナナメバトラノオ(松村、1916年)、ホソバホウビシダ(児玉、1917年)などもある。さて、ヤクシマホウビシダは葉面が巾狭く狭披針形を呈し、葉質はホウビシダより薄く薄膜質で透明度が高く、ソーラスは側脈の中部から基部寄りに位置し、従つてホウビシダよりずつと羽軸に近接して生じ、根茎の鱗片はホウビシダが披針形で黒味が濃いのに対し、ヤクシマホウビシダは巾広く卵状披針形でホウビシダ程先端が尾状に伸長せず、色は黒褐色ではあるが黒味が薄い。之等の諸性質によつて、かつて児玉親輔先生(植物学雑誌31巻17頁、1917年)も論及されている如く、本羊歯をホウビシダとは明らかに区別出来る独立種として取扱う事が妥当と思われる。ホウビシダの分布は北は関東南部(千葉県清澄山・三石山及び神奈川県逗子・小田原)に達するが、ヤクシマホウビシダも近時、伊豆半島まで北上している事が判明し、甚だ愉快である。検し得た本邦産ヤクシマホウビシダの標本産地は、伊豆上河津村荻ノ入(益子進、1956年; 倉田悟、1956年)、紀伊尾鷲市矢ノ川南谷(伊藤博、1956年、伊藤良、1956年)、同市木津(倉田悟、1958年)、大隅屋久島宮ノ浦事業所上流(布藤昌一、1957年)、同小杉谷~木魂神社(杉本順一、1956年)、同木魂神社(同)、同小杉谷~花ノ江河(倉田悟、1956年)、同小杉谷附近(同; 大村敏朗、1956年)などの外、東大理学部所蔵標本では、屋久島(正宗厳敬、1924年、1928年; 伊藤洋、1937年; 吉井義次)、同安房一小杉谷(佐藤幹正、1935年)、小杉谷附近(木村陽二郎、1939年)、同小杉谷一永田岳(同)、更に国立科学博物館所蔵標本では、屋久島小杉谷(採集者?、1918年; 田代善太郎、1921年)などである。尚、本羊歯は通常ホウビシダより小形で、羽片の斜上性が強く、その基脚は狭楔形となる傾向が著しいが、屋久島に

\* 静岡市八幡本町

\*\* 東京大学農学部植物学教室

Institute of Forest Botany, Faculty of Agriculture, Tokyo University.

は葉長 50 cm に達する発育良好品もあり、羽片の性質も変化が見られ、又一方ハウビシダにも羽片の著しく斜上するものがあつて、之等の点は両羊歯のはつきりした区別の拠り所とはならない。

**Asplenium obliquissimum** (Hayata) Sugimoto et Kurata, stat. nov.

*Asplenium unilaterale* var. *obliquissimum* Hayata in Icon. Pl. Form. 4 : 230, Fig. 160 (1914).

*Hymenasplenium unilaterale* var. *obliquissimum* Hayata, Masamune, Fl. Geob. St. Yakusima 82 (1934).

? *Asplenium resectum* var. *minus* Christ in Bull. Herb. Boiss. 2 sér. 1 : 1014 (1901).

**Distr.** Formosa, Kyûshû (Yaku-island) and new to Honshû (Provs. Kii and Izu).

This fragile fern is clearly distinguished from *Asplenium unilaterale* by its thinner and subhyaline texture of laminae, subcostal sori and wider, ovately lanceolate scales on the rhizome which are not so caudately acuminate at the apex as *Asplenium unilaterale*. In Yaku-island this fern is abundantly found at higher altitude, 500-1000 m. above sea-level, than *A. unilaterale*. In Honshû, however, this is a very rare fern and in Kyûshû proper and Shikoku we have not yet collected it.

○ シブカワニンジンの新産地 (里見信生) N. Satomi : New Locality ♀

*Codonopsis lanceolata* var. *Omurae*.

シブカワニンジンは静岡県引佐郡引佐町渋川鉦泉附近にのみ知られている固有植物であつた。[Journ. Jap. Bot. 32 : 60~61 (1957)]

杉本順一氏は此の地方の植相について論ぜられたものの中で、渋川附近の植相が志摩及び南伊勢地方と似ている事から推察して“固有のものはシブカワニンジンであつて今後志摩地方に期待されるものである。”と予言して居られる。[Acta Phytotax. Geobot. 17 : 127~128 (1958)]

この予言された如く筆者は南伊勢地方の尾鷲市小原野でこれを採集していた。念のために最初にこの植物を発見された、大村敏朗氏に乞うて、渋川産の標本を分与していただき比較することが出来たが、尾鷲のものは渋川のものよりやゝ葉の毛が少いように見える。然し大村氏の御教示によれば、渋川のものでもよく観察すれば葉の毛の状態について、多い固体少い個体の相違があつて一定したものでない由であるから、私が尾鷲で採集したのもシブカワニンジンであると同定して誤りがないようである。終りに標本を御恵与下さり、且、いろいろ御教示下さつた大村敏朗氏に感謝いたします。

**Codonopsis lanceolata** (Sieb. et Zucc.) Trautvetter var. **Omurae** T. Koyama in Journ. Jap. Bot. 32 : 61 (1957)

**Hab.** Owase, Prov. Kû (N. Satomi; Apr. 30, 1957).